

リツ・サンハーラ（承前）

小野島, 行忍

<https://doi.org/10.15017/2557080>

出版情報：文學研究. 11, pp.35-46, 1935-04-10. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

リツ・サン・ハーラ (承前)

小野 島 行 忍 譯

III 秋 (六一)

一

濱^{はま}の白妙^{しきま}の衣^いさきし蓮^{れん}のはなやける顔
ゑひ心^{こころ}なる鶴^{つる}の唳^{なき}の蹠^{あし}節^{ふし}の音^ねこゝちよく
みのれる稻^{いね}のほそやかなる肢^{あし}も妍^{かみ}はしく
姿^{すがた}うつくしき秋^{あき}は花^{はな}よめのごとく來^きりぬ

(六一) 秋 (Autumn) は舊曆の七月十六日より九月十五日まで
なり。

(六二) *Kasaa* (ハマス、キ) は學名 *Saccharum spontaneum*
といふクワホン科の草にしてその花は白し。

リツ・サン・ハーラ

二

大地は濱^{はま}すゝきに夜は光すどしき月に
川みづはハンサ^{ハンサ}に池はしろするれんに
林^{はやし}の邊^へは花^{はな}の重^{おも}みに垂^{した}下^{くだ}れし綺^{しめぞけい}素^そ聲^{せい}に
また園生^{えんせい}はそけいに眞^{まこと}しろにぞせらる

三

さばしりて美^{うつく}しき魚^{いさな}を帶^{おび}緒^をとし
岸^{かた}に居^ゐりたつ白^{しろ}き鳥^{とり}の列^{つら}を瓔^{えい}珞^{らく}
汜^{ひる}き沙^さ汀^{てい}を胡^こ瓜^かの腰^{こし}とせる川^{がは}は

三五 (一三〇七)

愛悦うれしむをそゝられし艷女あだしめにも似て

いまやしづくと行く

(六三) *rasana-kalapa* (帶緒) は數條の緒より成る帶なり。

四

しろがね碑礫はす根にも似てしらく

水ふりすてゝ百層もたやすくすゝみ

風の煽りにゆるゝ雲もて天の一方は

よき塵尾(六四)にあふがるゝ王の如くみゆ

(六四) *chimara* (塵尾) は犂牛の尾や孔雀の羽などにて作ら

れ、涼風を送り蠅など蟲を追ふに用ひらる。

五

ときしむら睫黛まつげすみの色もて美しき空

午時花(六五)のなせるくれなるのおほ土つち

玉まきの蓮みつほとりの池塘ついでとは

地上いづれの若うどのこゝろをか

あこがらざらむ

(六五) 午時花 (*bandhika*, *bandhu-jiva*) は學名 *Pentapetes*

phoenicea といふアラギリ科の草にして、その花は赤くして日中に咲き翌朝しほむ。

六

あやに美しきこすゑそよ風になやまされ

咲きいづる花のむれに芽さきもやさしく

ほとばしる蜜はうつゝなき蜂に吸はれし

コーギダー(六六)は誰の心をかやぶらざらむ

(六六) *Kovidara* は學名 *Bauhinia variegata* といふマメ科

の木にして黒檀の一種、その花にいろゝありてよく女の麗しきになざらへる。

七

星のつどひのいみじき飾りをつけ

月のかんばせ雲に鎖ささるゝを免れ
隈なき素影ひかりの羅衣うすねまとひし小夜は
をとめ若女わかじめにも似て日(六七)ごと生長ねびまさる

(六七) 秋になりて一日々々と夜の長くなり行くをいふ。

八

波のうねノゝあひるの味あじにみだされ
堤のほとりもせに驚おどろてう鶴むらがり
はすの花のこにて色そめなせし川は
あまねく鶴つるのなくねもて人を悦よろこばす

九

見るめ嬉しく心虚うつろけしむる光の華はな臺たいし
つめたき雫しずくしたゝらす清すが々しきつきは
夫つま離わかれの毒矢(六八)にきずつけられし麗女よめの
うつし身をいとど惱うれます

リツ・サン・ハトラ

(六八) 旅にある夫と離れて暮してゐる妻にはこの頃ことに
清涼なる月の夜にひとり寝するは心身ともに堪へが
たきを云ふ。

一〇

實の重みに垂れし稻生いなぶそよがし
花もてうなだれし梯でいこ沽(六九)ゆきさぶり
ひらきし蓮(七〇)しける池い揺る風は
わかうどの心をわりなく動かす

(六九) taruvara (梯沽) は學名 Erythria Indica といふ木
にして其の花は深紅色なり。
(七〇) vana (茂) を「水」と讀むもあり。

一一

忍しのびびじじろなる鶴つるのつがひもて飾られ
開ひらききししききよよきき紅蓮くわんねんや青蓮せいねんもうつくしく
波なみのなぬぬ々々そよ吹ふく曉あけの風かぜにたちし池いけは
いたく人の心あこがらす

三七

(一三〇九)

一一二

因陀羅の弓はくもの肚裡にきえ

天の旗なる稻妻もいまは閃かず

まな鶴は羽風もて雲井を煽らず

孔雀もかほをもたけて空をみす

(七一) Babhid は「バラ鬼の殺戮者」の意にして空界の大
神 Indra (因陀羅、帝釋天) の異名なり。

(七二) balaka は小きき鶴なり、或ひは baka (學名 Ardea
nivea) の雌なりと云はる。いま假りに「眞名鶴」と
譯す。

(七三) 孔雀は雨季にみごもる。故に雨雲の現はるゝや欣舞
し鳴きて之れを望み見るなり。こゝは「さきに雨季
には頭を上げて雨雲を見し孔雀もいまや秋になりて
は空を見ず」の意なり。

一三

愛神は舞奏づるをやめし孔雀をすてゝ

頃よき鶴に近づきカダムバ・クタジャ
アルジュナ・サルジャ・ニーバを去り
花さきて美しきしまそけいをおとづる

(七四) kutaja は學名 Wrightia antidysenterica といふ木に
して其の種子は驅蟲劑として用ひらる。

一四

にんじんぼくの花の香もて怡悦しく
のどかに栖める鳥のむれに啾々しく
青蓮のまなこせる鹿あたりに立てる
林園は人ごゝろ儼らず

(七六) sephatika (にんじんぼく) は學名 Vitex Negundo
といふクマツラ科の木にして漢名は牡荊といふ。

一五

曉に白蓮素蓮睡蓮を揺りしきりつゝ

そのまじはりにいと冷やかになり
葉末に宿るつめたき雫ふるへる風は
わりなく思慕をそゝる

一六

豊の堆は地にみち長閑に立てる
あまたの牛のむれもうつくしく
鶴と鶴の集に呀々しき村の邊は
ひとくをいみじくよろこばす

(七七) 印度にては稻穂を牛の踏むにまかせて稻扱に代ふ、
こゝは其の情景なり。

一七

麗女のなまめかしき足どりは鶴に
月の顔容の美しさは開きはすに
酔ひごゝろなるまなざしは青蓮に

リツ・サン・ハーラ

また優しき眉のしなはさどなみに
たちまさられつ

一八

若芽はなの重みに垂れし緑こき蔓草は
嬌女の飾つけしかひなの麗しさを奪ひ
無憂樹の花かとかやく八重そけいは
齒もあらはに白き笑の素影をくらます

(七八) 無憂樹 (asoka, kankei) は學名 *Jonesia asoka* の
ふママ科の木なり。
(七九) 「白き笑」とは大笑の意なり。

一九

愛妻はいとふさやかなる鳥羽玉の
いみじき曲髪に八重素馨をかざし
また殊尤き金のみゝ環つけし耳に

三九 (一三一一)

とりぐの青蓮をよそほふ

(八〇) kungalezu とあるに據る。

二〇

こゝろ飛びたつばかりの嬌女は
香水つけし眞珠の瓔珞を奶丸に
帯緒をいと服よかなる腰の坡に
また音もやさしき玉纏の踝節を
蓮華はづかしき足に今やかざる

二一

雲きえて月と星みちたる空は
さきし睡蓮に蔽はれ紅鶴すみ
綠玉の光もてる水美しき川の
いみじき明麗をうばふ

二二

秋たつや
睡蓮にふれて冷たき風そよぎ
雲の群さりて十方こゝちよく
みづすみ地は淤泥もかわきて
空は月の光くまなく星輝けり

二三

あかつきに
美しき少女の顔ばせの如き蓮は
日の光に夢破られていま開くも
するれんは月輪西山にしづむや
夫は旅なるにひ妻のゑみに似て
かけひそむ

二四

いとしき妻のくろき眸の美しさを青蓮に
 さやぐ黄金（こがね）の飾帯をゑひ心なる鶴（ハシガヘ）の聲に
 唇のやさしき麗しさを午時花（六五）にしのびて
 こゝろ亂れし旅人はいまや泣く

二五

美しき秋たつ明麗（ひかり）は
 たをやめの顔に月の暎（かげ）きを
 玉（たま）の蹠（あし）飾（かざり）に愛（いと）しき鶴（ハシガヘ）の聲を
（六五）
 またこゝろ奪（うば）ふくちびるに
 午時花のやさしさを残して
 いづこともなく行く

二六

リツ・サン・ハローラ

ひらきしはちすの顔ほころびし青蓮の目
 咲きしばかりの濱すゝきの白妙の衣装ひ
 するれんの優しき美しさもてる此の秋は
 いろめきたてる愛女（いとこめ）にも似ておんみらの
 心にこよなき悦びをあたへよ

IV 冬（八一）

一

新芽立（あひめたち）と果實（このみ）うつくしく
（八一）
 ロードラ咲き禾米（こめ）みのり
 蓮はいろあせ霜ふりつゝ
 この冬ぞ來ぬ

(八一) 冬 (Hemanta) は舊曆の九月十六日より十一月十五

日までなり。

(八二) Iodira は學名 Symlocos racemosaといふサハフタギ科の木にして其の花は黄なり、この樹皮より赤色の撒末をつくる。

二

胸もと愛でたき美女の奶丸は
心ひく洎芙蘭のいろに映えて
ゆきか素聲かつきかとまがふ
眞珠の瓔珞もてよそほはれず

(八三) nalamkriyante とあるに據る、冬になりて冷たき装身具はつけざるを云ふ。

三

手纏うでわは麗女の双の腕に
あたらしき羅裳は胡瓜の腰に
うすぎぬは脹よかなるむねに
はだつかず

四

艶女は黄金や玉の唾ける
綺羅帯もて腰もかざらず
ハンサの聲なす踝飾もて
蓮華のやさしさそなへし
うつくしきあしを装はず

五

嬌女は鬱金をぬりしはだみ
花じるし傳けし蓮の顔ばせ
また伽羅かぐはしき頭をと
ともねのために身じまひす

(八四) Patta-teta は顔または身に麝香などの香料もてかきし飾りのすぢなり、今かりに「花じるし」と譯す。

六

たはむれの

つかれに顔やつれ色ざめ

悦びえて幸はふをとめは

齒さきにやぶられ惱める

くちびる惟ひて高笑ます

七

奶房ちぶさふくよかなる胸の邊ほとりめく

うるはしき大地(八五)にさしよりて

その刮そだたきに遺瀨やるせなさを催せる冬は

葉はすゑにやどるつゆを滴したてゝ

あかつきに泣くにも似たり

(八五) sobhan の次に mahim もしくは bhunim などの

字の省かれたるものと見るべし、即ち「地」を女に

リツ・サン・ハーラ

「冬」を男になぞらへたるなり、而して斯かる際には女の泣くが妥當なるに此の句は異れり。

八

成りなりたる禾米こめみちて

くじかの群むれもうつくしく

愛らしき鳴さゞめかしき

村の邊ほとりはひとの心隙まひららす

九

酔ひ心なる鶯鳥もて飾られ

ひらきし青蓮もうつくしく

水すいすみていと清すが々しき池は

若人わかうさのこゝろをうばふ

(八六) yuhan とあるに據る。

四三

(一三二五)

一〇

いとしきひとよ

霜にもよほす冷たさにみのりて

風にゆり頻かるゝブリヤングは

夫離れし美女にも似ていろざむ

(八七) priyangu 別名 govandani は女がきはると花咲くと

云はるゝ蔓草にして、色化粧料となる。

一一

くらは花のみつの香にほひ

肌みは息ざしの風に薫らされ

こひのよろこび溢るゝひとは

互に身をのけて長まりねむる

一二

齒きすあざくしき唇と

つめに抓き痕つけられし

奶房もてうら若き麗女の

ばさらに戯れしことこそ

かたらるれ

一三

鏡を手にせるある愛女は

嗽ほてるや蓮の顔を粧ひ

また戀びとに口露すはれ

齒さきにやぶられし唇を

ひらきてみる

また現身うつしいたく戯れのつかれに憊み
 蓮華の目はよるを睡らでいとあかく
 髪かみの房ふらこきたれ肩かたの邊へりにとけて纏れ
 なごやかなる目の光にほてらされし
 ある嬌女たをめはねむり行く

また髪のはし雲にも似てくろく
 眼まなこよかなる秀立ほだちの奶房ちよさの重みに
 ほそ身しなやける或るをとめは
 怡悦うれはしき香かほうせし徒ただなる華鬘はなかつらを
 頭あたまよりとりて毛すぢをとゝのふ

また悦よろこび湛たへ唇くちびるに優美やさしななされ
 はだみは爪つめにきすつけられて
 こき垂れし愛めでたき烏羽玉くまたまの
 曲まが髪かみに目ほそめしある嬌女たをめは
 戀人こひびとに樂たのしまれし身を眺めて
 はだぎをきる

(八八) *Chlorophyll* (優美) とは男に齒などにてつけられし
 傷きずのなまめかしき様を云ふ。

また長き戯れにつかれ
 やるせなさ催もよほして細身ほそみいとしどなく
 眼まなこよかなる奶ちよの邊へりうれしさに毛けだち
 あやに美うつくしきある艶女あだしめは香油かほをぬる

とりふゝに樂しく若女の心を奪ひ
 實りたる豊の禾米は村の邊にみち
 常にいと心ちよく鳴の列めぐらし
 霜を具したる此の時はおんみらに
 さちをあたへよ

(八九)「此の時」とは冬をいふ。

(未完)

第十輯所載「リツ・サンハハラ」修正及正誤

(頁) (段) (行) (修正)
 七五 下 七 「高きより見る人をして懼れしむ」
 七七 上 五 「蓮のしげりに水のかげろひ」
 七七 上 七 「みそぎするも心地よくして」

(誤) (正)

| | | | | |
|----|---|----|------------|------------|
| 六九 | 上 | 五 | Vanṣasṭha | Vanṣasṭha |
| 六九 | 下 | 七 | Panṣkior | Panṣkar |
| 七二 | 上 | 九 | ちつぶち | ちつぶち |
| 七二 | 上 | 一二 | Vina | Vina |
| 七六 | 下 | 一 | ほためき | はためき |
| 七七 | 下 | 一三 | こめる | こるめ |
| 七九 | 上 | 一二 | 東海 | 東海 |
| 八〇 | 上 | 八 | anu-lepana | anu-lepana |
| 八〇 | 下 | 六 | しづこゝなく | しづこゝるなく |
| 八一 | 上 | 八 | ときめかず | ときめかず |
| 八二 | 上 | 一一 | 小鈴など | 小鈴や玉など |
| 八三 | 上 | 九 | にいみづ | にひみづ |
| 八三 | 下 | 四 | はかりの | ばかりの |